

大阪中之島美術館 菅谷館長が講演 「さまざまな視点を知り、 豊かな美術体験を得てほしい」



菅谷富夫館長と講演風景



崎元利樹理事長

関西・大阪21世紀協会は、賛助会員の皆さまに当協会の事業活動について一層ご理解を深めていただくため、大阪中之島美術館において事業報告会を実施しました。当日は、皆さまの日頃のご支援に感謝し、館長の菅谷富夫氏による講演会も開催。また、同館との共同企画「協会設立40周年記念事業・Osaka Directory」や展覧会「ルートレックとミュシャ バリ時代の10年」をご覧いただきました。

人々の心に文化の灯をともし、育んでいきたい

冒頭、挨拶に立った当協会の崎元利樹理事長は「今年度設立40周年を迎えた当協会は、2009年に大阪府・市からの出向や財政的支援が無くなって以降、経済界や市民の皆さまに支えられて活動を続けてきた。この間、組織としては小さくなったが、上方文化芸能協会の活動や日本万国博覧会記念基金事業の承継、『アーツサポート関西』事業の推進など、取り組む分野は広がってきた。今後も芸術・文化を媒介として諸団体との橋渡し役を担い、人々の心に文化の灯をともし、それを育んでいきたい」と呼びかけました。続いて大西晃専務理事が、当協会40年の歩みをはじめ、今年度からスタートした第5次グランドデザイン(中期計画)の行動指針や今後の活動について説明。その後、大阪中之島美術館の菅谷富夫館長が『大阪中之島美術館と大阪美術の発信』をテーマに講演を行いました。

菅谷氏は講演で、大阪発祥の美術作品について紹介。江戸時代から明治時代にかけて、儒学者や医者、武士、商人ら教養人が描いた「文人画」をはじめ、昭和初期に裕福な市民層が「浪華写真倶楽部」などのグループを作って前衛

的な写真作品を発表していたこと、吉原治良をリーダーとする前衛美術グループ「具体美術協会(1954~1972年)」の活動などを紹介しつつ、当時、それらが高く評価されなかったのは、アマチュアが独学で制作したものであるがゆえに、アカデミズムの視点による美術史に位置付けられていなかったためと解説しました。また、それらの大阪にあるさまざまな美術作品を同館で展示するのは、大阪の自慢をするためではなく、東京発の美術ジャーナリズムやアカデミズムが示してきた美術史とは異なる多様な視点を知ること、来場者に豊かな美術体験を得ていただくためと強調。今後もそうした視点による展覧会を開催していきたいと語りました。

講演終了後は別会場にて、賛助会員さま相互の交流会を実施しました。



開催中のOsaka Directory 2(貴志真生也展)を鑑賞する賛助会員さま